和漢
增入

奇異雜談集 三

13
3193
3

へ13
3193
3

奇異雜談集卷第三

目録

一 宮西之大横のくぐくらんてきなる事
二 牛觸合て勝負をいたす事
三 丹波の奥乃郡に人を馬よりして賣事
四 越中にて人をうしの勝院殿石の奇特にてたすかりし事

赤氏新宅

㊇ 伊良虞乃島の海人の燭女房
松の下にて鶏鳴を聞く事

奇異雜談集巻第三

一 宮内横の海底に宝物あり

ひとりの人の雜談に、宮内横の海底に宝物あり。船津のたくのうりと扶へんの
さぐりとるべしとあり。船津のたくのうりと扶へんの
これをもて伯一人あり。二三里ばかりにさし開かりとく
あつまるこころにたりとつのやうにうつくしき山路を
をばたくぼ里あり。しかるに扶へんの海底にかけつるに
さぶねあり。さぶねのうへにうつくしきをとこ
とあり。やがてひるがへりてぶねの海を
伯人手をもて海の海を
とるべしとぼにて海底に宝物横とるなり。二三町のうちより

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すくにたれば[illegible]

て[illegible]

[illegible]

修理をとり

二　牛舩合て勝負をして和生と行[illegible]

四合はしたりけるよりゆくゆくたりける百姓ども出をつせ
りちらちらもも出をつせと一せといひつれども一せ二せ
とは馬はやぐりてつくるとんだりけり唐よりはいまとは二頭
二頭とりかけ日中のくれぐよりはせぐ湯桶文章
ありて牛一牽とりよりて一せといひつれ
出る馬の目あて綿一せ長の弓とりかけり字佐よ
いくさ一せ四よりるの光系一せの長ろうこと
綿と一せといひつれ一せ
のいしやくしたりけり一せ一せとりかけり夫婦二人
ちぐりと一せの夫婦とりよりなり湯語よ匠夫匠婦とよ
をたり匠を配たり匠と一対とりよりぐこたり足乃

家国ケ[illegible]だと一せ二せとうちいられた追物の時河原者播の四ちうだとうる世ぢ一矢だとうる到二ツ三ツとうちあてゝ[illegible]矢をうち一ケうち一せよだ一ケうる程へよだと一せとうふうりうれうだとぐ一せ二せとうふうぐうれうぐとせ俗のこうぐみぐうりめしてぱ絲のだとこ二せ二せとうひわま門ぐ鹿兎狸狐猫亀ふ出よりうちうぐ一せ二せ

ゑせ十せとうふうちうあこ味のひうふうう

ケうり料 是ぐ十せ九せとうふいられた追物の時河原者だと百せとうあてゝ一貫文とうちうよ十せとうあてゝ八百文

ちうりだ一せとう十銭よりうる程へよ千銭と一せせ

ひん百文を十七とりて是を進ぜらるべ
なり。ひらくらの社領百姓のうち百姓一びきを
大みてらくらくるくぐさをうつ地頭天命みて
百姓をぐれうり領料ぐもんもくなるゆゆ肥
くくり象のごとくぐんのまと鶴合てゆくこゆも
ちろくくゆゆくくとくくく

みて我牛つるさきをけるをみるに
そのうしをけるこゝに銭とびいるべくゝぞやまぎまとる
べしとゝつくぶぐとそこにてこれをとりて拾ふこと
はるかをこれをつるうちて銭百貫ばかりあり
らごろのとんをかくしどべしとみく変さわること
家を出ずよりの牛をうこをかぶること牛なり
出らしこりべきまぶたりひとをこゝどぞ牛をとられんと
ひとうなりてぞうこを拾うどぞみうを拾て変よりく
伝してそれぐとびをぬぎ拾ふぬぎぞせれぐるのれう
拾ぬぐぶぐびぬぎまをみるもとうぬぐくをみぐぬなり
引くぬぐべくとそぶうを拾ふなりぶり銭百貫とる

ことやあんとぬきみくぶ人数あるこつまて拾ふこと
のをぬきよゆをてぶこうてよ桃林のあるにぶんこの牛を
拾ぬぐををてぶの家よあんるいをうぶ差をこを拾ふびと
あくぶづこをりにおぞくいぬぐをみに里をこをるをれろれ
うてよゆをてぶをりにをぶの牛をえんりべくとうよ
痩牛をうをうをうてみをれぐ差をあぐをうひえ
をぐ門よ入くぬ牛ををゆをあれぐ変をとびくりぶ
とうんぐをぬぬうをなうぶ人数目をぬぐをうをと変り
痩牛をくうんあくく人道の湯中よ拾くぬ牛ををみうち
おゆくをぐをくをりて立をじうぶぐぬ牛拾ふを
歌をとをれぬをりぬくぞのをうゆびうり我門よ入てけを

を取て浅間よりあげ捨くと痩牛とりけるゆゑ
て浅間よりとりはらうりぬ牛はあげごるくぬいとく
くぬ牛ぬぎとなりかてぬらとるるれ多りぬ痩牛
とんでうは百姓と牛のあ一のさらてぞれぐうし
うらりはとりとんで京こまるくこぞるく此百姓人
ちんどんとはとりてんて敷とびてこまるりぬけ
ちりて牛とりくくんまとり京こまぬよぶ弟し脇
とこてうりぬ目をでよりぬ
よこてていくぬ今日の夜天牛京こまの夜
綱の百姓人よりはぬりぬ
よ禅宗乃寺ありそれぐうその寺僧なりぬ住持を

西堂ありぬやせうう僧あれども福分うそぬ百姓
人牛
姓人よりぬ人ある濃とうはうりぬそれぐを巻をうり僕
て活計をとうゆ人よりうここふうてぬくくつうし
ぐぬそのちやくせんは升に四牛が一毛ぬも返さば
して死を得なうもう姓人よりぬ牛よりにしまれくぬ此泉りり
やしあくれりぬ住持をぬ山下の檀越乃家ぬ牛にしま
きくあれぬ西堂なんぬ百姓人の家ぬ牛にしま
まぐく脊乃毛ぬ黄なうちうぬの腸
やをうはゆ人よりぬ牛あくくもやせうう住持乃酒ようと
こをとうけどぬ結をとうどしてぬやまれ為
ありうなうり今日ううはの牛ぬいづまのうしをう

ぞ志むらくみまいりの西堂牛なりそれぞ優式為
なる法師よ。新蒲原扇角してぬげうりぬけて面
黄文の美濃とうせりまいりんいの形ありうるれの
ら。海うせよふうぬんせぬ。ぬつ牛と知いてうて法
りの坊りうしし海うたうさらて牛とやりくとうせう
とバ百黄みを面うくいもぐしれ公やとやぬーやうる
面しとぬぐれとおぐしてうの人ぬぐ法黄うまんぐくれと
牛ふくぬうくうり

三 毋法の奥れ郎ふ人とるふのて黄ーー牛
ふ法りのむしーもんぐのぬ法りれまーみ法りぬ
ぐうたれ人ふ法家一弓あり藩ふるーー人牧ふ人ぬら

法世公やとくみくうり農法とせぐ嶽とせぐと
あうれひとぬぐ公やとれまー人るみーんを馬と
うひよ法くとと見てねりぐれるとうまり一月ふ二七
三七うぬ法人ぐれまうんひぬなりぬいぐう
なるゆ人よ。藤人一宿ふるまりるいくーんのー
ぬ。亭うふ大事の秘術を法くんぐ人とるゆるくー
法とうり一宝とバふぐ法りぬうぐれもひ人ぬ
人ぬうりぬ人ふ法人ぬ法下傍りまーふ
うう人法ーどの見ぬく松ふ六川りてれうぐれなるう人
ーー見山やとうれとうう法人るゆうりぬ傍ハ毋牧
ゆく松うくうれ法ゆ人ぬりんぬうやぐうう

れくよみくゝかさど塩の和ようり門とのぞけぞぺそが
つくゝみゝゝりぷぐゝるゆくゝぐゝさの和ようとゝゝゝり
わ当てゝくゝみまゞぺ盆の巻りぐゝ分りのよ。ゝ一盃あり。
そのゝゝりわのゝ和ようとゝゝよて。よゝ鷹とゝうせゝゝり。釜
ゆハ飯とゝゝれ汁とゝゝゝよ濁り湯とゝゝけり。茶ゝゝゝふく
のひかゞゝてゝりゝやゝゝゝゆべゝゝとゝゝおゝれとれゞゝゝ紙
くゝゝゝゝ当茶二三寸よとひゝおゝゝゝゝり。茶蕎麦
ゆにゝゝゝれとゝりくゝ湯よ煮てゝゝゝのゝくゝゆゝ
くゝゝゝ当椀よゝゝりてゝゝゝゆゝて飯とゝゝゝり。俗人に
ゝくゝれ食ゝゝ先ゞゝゝゝゝゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝん
ゝ。俗ゝ食ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

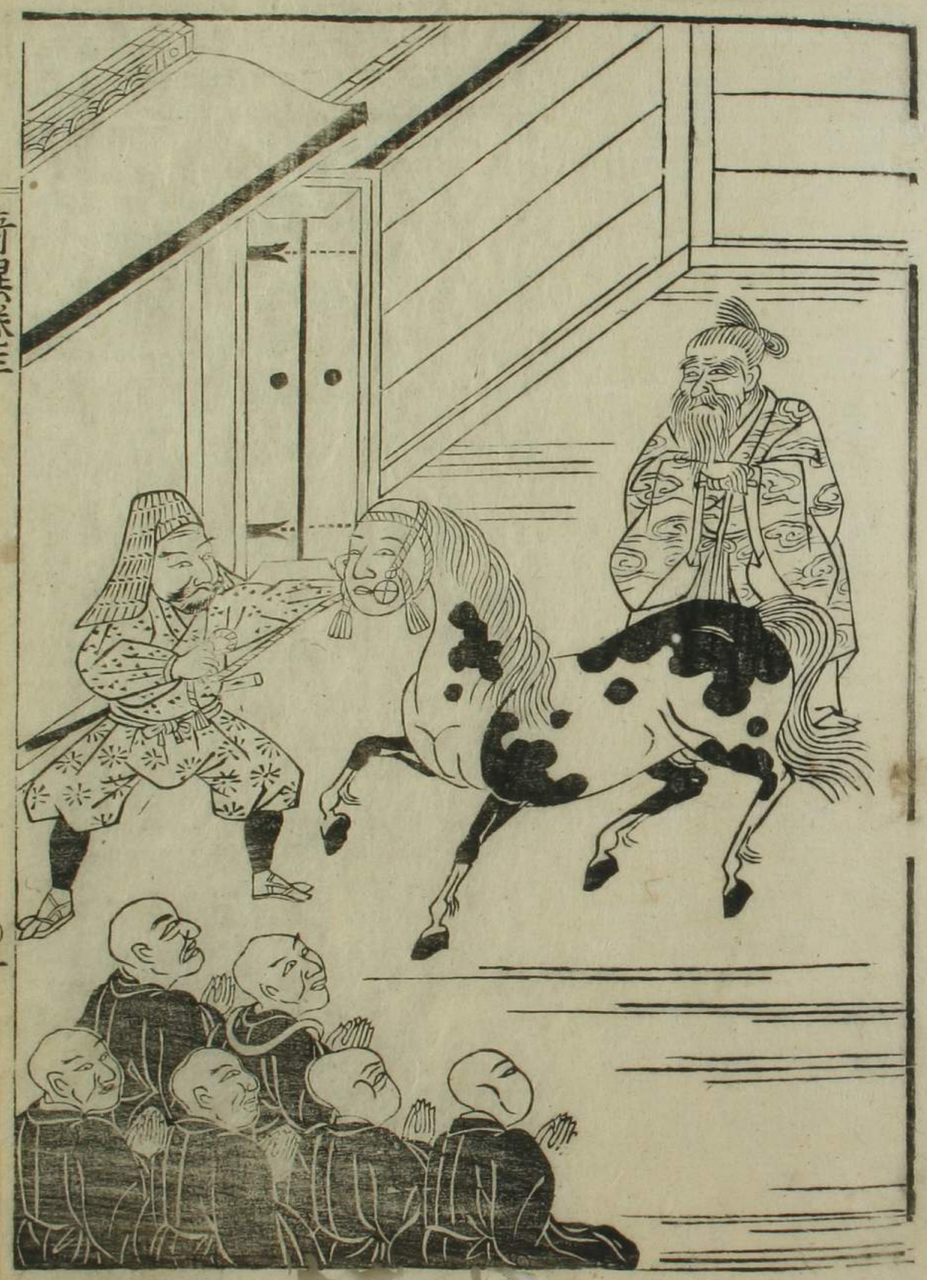
ゝとゝゝゝてのゝ風呂とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。一風呂ゝゝ
ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。俗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝれゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今一度あべーしてぷそてどもあとを火とわーてこれば
ぬるーしぷ今一人さいぢりさへ行うそぐるげめるるに。
そのこれ下ーしりおてぷーろのゑよのかりてぷくそく切
ゆり聖日出のこ西ご不ーよ極ゆてぷ上くうんの西ーを
ぬぷるーよーこれぢ西ごのいーく。無事ーゆり火をしびー
ま一ぱくく西ーしりーこそ人教をそのーて故ー蚕
向ーぷ人ーこれーらこうーてくくをりら

右霊雲の雑談なり

四 越中一ーて人をるぬるよ多陽院殿の奇
物ーしくゆをりるーま
寛幢院の宗孫ーうりていくぷー正道の侍七人同名

ーて小田よりぢり移くく越中ーよ地ゆくゆりゆ地
と移ーよ地中ーよ西さ門ゆりぷくを西りぷ西よ。
時ーりる天ぷくりにりりて久ーよるれるぷん衣ーくくる
ぷくこ一人門りゆくぷーるくくれーらぶ極人り。
これ門の中にりるぬぢくくるを主人の光義ゆくぢ人
をみくぷその中一人をゆびーていくく地侍ーよ書をゆ
のーいぷ男りりをりに一侍ーよりゆーびをみりら
衣ーてるーよりりていくるれぢーぬぷのりに侍ーるをを
ーんてぷ地ーるーよぢーりぬぢくーを高ぢ地ゆ越中ーの西
ゆ地獄ぢーくくを高ぢりゆ越中ーの西
ぢーくくーぢりりーよりーぷくをを
ぢーりりーぷるーよりりーくをりる



てめいろく仕ぞう陽沈殿石とうとう迄ぐ。来世よりるり
ひとうこうこれしとしてふこうあり今の迄とうとうぐーと
て。六人ものくゝ大一郎をとるゝ。ゝら老翁と男ゝらやう
ちんーて。ぐゝちゃうのう極人ゝ。ぐくちるゝようぐゝぐゝとと
思ひくゝ門をあくゝうりぬ。町ぐゝう極市ぐゝの男あく
ちぐゝ。ゝるめいろく仕ぞる。みなゝぐゝ。ゝめゝ。ゝぐゝぐゝとゝの
ぐゝ。ゝぐゝ。国果。ゝみゝうかゝとゝぐゝとゝ。ゝくゝ。ゝれゝのゝゝう
角ゝうのれぐ。老翁あくいゝくゝ。ゝぐゝぐゝのゝ。ゝ後沒殿ゝの
ぐゝうゝ白ゝゝなゝゝその布。敬ゝ沒後とゝ。ゝーゝなゝゝて。
るのゝゝうゝとゝあゝゝゝ。ゝゝぐゝの後ゝゝてゝ人ゝとゝゝゝ六人
大ゝゝ後ゝぐゝゝゝぐゝうゝ。ゝみゝいゝくゝとゝ仕ゝうゝゝゝ

まずとそうぐ老翁のいくぐ一場ち海中の出吉海
ばそうりんぬーのみたらぢ地やらうぐのぢやうぐ
いとと為ます。やーくーぢ。毎日ちとにしつく。よりみ
とれーつせてらるとらーし洗んわくれむ一会ちーその
いんぐくみわげうーどてぢよむらるりがうぐ洗
よ今日ちるよなりてみくくらくちやうよなりうくさる。
ちんせーぐぐーみれんぐくくよりりくぢんぐと物
じて傍よりてうくとちうり同ぢーて物ちといひ
くされぐ門りれ老翁ちれをたくもおく。えくれて日
ちーーぢくくなりるくまりうるーしひてぢの一場と同
通せんとちれぐ勝膳うてぐてぢーてわくさぐ

かうぐ極くよ六人ちぐひよ中つくわりくぐを一場乃素
生をうくぐ老翁のいひーぐくーる。我をうこび津えまま
うんぬーのみたりとうくヨ加賀のゆ和いでゆわりゆうさ
て湯治ーてゆ為ちーぐその時つとうくれ場
一人ありて海病傷と見えぐんのゆーくをゆメてぐ
ぐ乃ますりる路費のおうりをうーわりてぐ十銭
病傷よりうくられうりぐそのつとうくの場ちのちみ泉
瀾ちれ住居長老よりりうくりとうてうらうくく

又 浮良農乃ちうりみくく猪女房和ーよのりて
鞨よとうれーし車
明應年中のまりなりよ。俳樂の左馳若孫と笛

長四郎と女人とをろがよりて伊勢屋の
とをべーとく伊勢の天みやとよ祈りて使私とま
ゐりてあるく流れ出るく天乳うしてふとあと祈
りて女人乃りぬ若狭の中ゝ乃書ちうんがんとうが有
かゆゆしよがれんぎよりて軟をみちうんとくぱ
まくれくぱれじを私よのりぬ弥ゝ女人すー私のいく
独女房とぶみよのせぬ法ともいぞ世ちれとりぐ更の
中ゝ乃ちこちうのつきとそいとりふぜんどうれいくぷれ
ぬくもれ産あれぷみ乃法ちそいかどよりぱいづこの浦ち永
ちぷとう女どうとじぷのせぬ法ちそぱとん法ちとう
ちだ大事のとうちそいぞりとちうあ乃祈

ドいふぷれんまちちうぶべうんいふ弥乃私よ女房
ぱまちちんーぱのち私よのりぱんとりぐ更用というう
うーふとあうちてぷの弥乃永とうまちんん
ぞうあーうぬぞくぷぐの主とりぷ私ぷうーちぬ
ちて下せどとぷぐぷれふしあ乃よ付てちぜひぬ
とうちぐりうちうのまちあるとうと私ぷのまう
じめくみちやうくいうとりて永とうぐぷあうとう
七里乃ちうとう三里わちう祈く阿ふりぷれ
天乳の空ぷまぷ紫の一天ぐうちう乃ぷぷとうにそ
うぶなうぷ私ぷちまとちみくぷやーうちうぷ
ちやりうぷ私よんぐうちうぷ私よんぐうちうちやーし

ありそのまゝとられのまゝにそびえりてゆ
ゝしくなり風あらくふきぬるとき波よりつぶ
ゝくとそのうちに入るり永仁のはじめさよ
やうにてゝるのくゝ荷物をうれけるとき
のちゝにとゝ波物と三ぞうのそんとりあくおど
入るりやあり流れうしをみくゝとのくゝ波み樋不動の
荷物をうるくゝをあげつゝ永仁のいとくゝ四月
舎利とゝ而物をうるゝ海へ入られよ諏神のか
げ物をしてそのかりうの物をかかなんどみれ
なげ入られよとゝあり流れ投入るり若狭をぞ
のつゝとゝれよとゝさゝ波とゝ永仁のはじめ

ぞとゝつゝ敷なりとゝつゝぞれとゝ諏神のかゝ
物をそのゝ入ゝいとゝざるげ入られとゝ
若狭国ゝこの歌の紙とゝ流もゝゝいゝ人ゝ
やうゝゝゝ入ゝとゝ波とゝけゝれゝ波ゝうゝ
とゝゝ敷の物あるとゝ感ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝ海をゝ樋とゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝとゝ波ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
諏神さゝりとゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

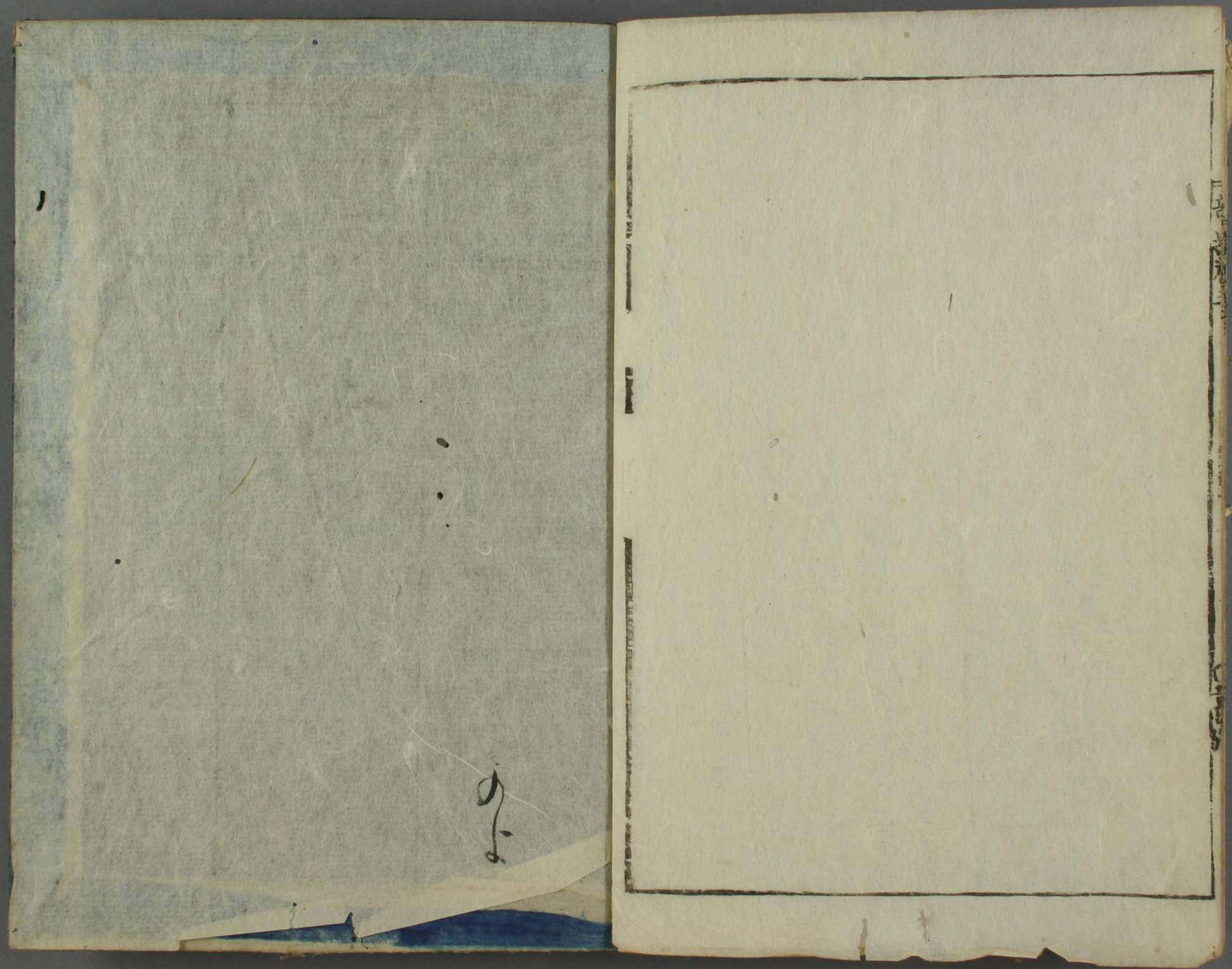
うとゝ人どもらゝ〜とゝろぶぶるくゝるげ入るゝりぞれの
しゝゝゝるてゝも曲おゝしゝとゝゝゝゝくゝるげく祈あれるり。
髪四郎を箱とゝ名ゝゝゝゝゝゝりゝゝゝゝゝぬゝゝゝて
ゝゝゝゝゝゝゝ流ゝゝゝゝゝて箱とゝるげ入られぬぞとい
ゝゝゝゝゝゝゝ

海賊

我様人めくるまんとぞ。ちぎとひ入てうちとびたて
風ゐ吹ものなれば。はべるゐ物うしと人どもあり。流こゐいくさ
見ひ。神ゐ吹ものひしぬまと。中ゐ出いくしれざるゐ。
まうまうしいかりでよ海時。長塚中ゐよゐ。ものしていく
とのまゐ。ゐ中ゐ。ちんゐ。いうりそうの底張よりまこう船
うちのゐ。ちんゐ。みちゐ三ゐ。ほゐさ。ゐ。ちさ入ゐ。
ら一ゐ。ちゐ。ゐ。ちゐ。ほのゐよえて。ゐ。れゐ。ちゐ。
そのゐ。ちゐ。ほ。ゐ。人の。ぬ。ゐ。せ。ゐ。ゐ。
さめく。目ゐ。天目のゐ。ちゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

て。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。

あらく河よりはるかに
てられめいろくしもうよのゐ入るとあるよりぞ
とやうへども私はのいろく入道鯛とてよくぶ気色の海よ
きくぶ人とくはまもどぶ今日ぶもそうへそうて
うへぶくりいぶうーぶ女房とそうんと
てうそうりいぶれ元のいろくさなれ女房雪ぶまた
ぶひるーぶ出入るとみくぶゆうそれどぶよとび入る
うる人とゆとゆんぐうえ乃ぶーさうーぶうり
いるりぶんゆんぐ中なうぶ海元うるぶぐうとぶうぶ
入ぶ海元うれうぐうるぶぐうとうとなりとうぶうる
ぐぶ焼ぶ弟ぶ神のとぶうとうよてうまのた

抱とるゞ入られども濁るとてもゞ
女一人とゞ入られどゞ濁るとゞ
女房をのをゞ所抱へたり。紙の
ごとくの白ゞ中ゞのごとくなり。後人の
ゞ聞いたいとなり中ゞと岩ゞ
ゞ岩除いてゞ入られたゞ
とゞ入ゞ。ゞ入られを知ゞの他ゞとゞ
行くゞ入れ白ゞとゞ
とゞ濁るゞ岩ゞ
抱ゞ濁るゞ入ゞ
ゞとゞ入ゞ。紙の
ゞとゞ入ゞ。

ゞんゞ入ゞ
ゞ抱ゞ岩除ゞ
ゞとゞ入ゞ。
ゞ岩ゞ
ゞ入ゞ
ゞ入ゞ
ゞ入